

月探査ナショナルミーティングの概要

4月3日（土）有楽町の朝日ホールにおいて、月探査に関する学生を初めとした一般の方々との意見交換を目的に、約480名（うち、学生の登壇者53名）の参加を得て開催（プログラムは、講演、討論（前原宇宙開発担当大臣も参加）、対談の3部構成）。

第2部の討論において、応募学生から選ばれた5名のパネリストや登壇した学生、及び会場から出された意見の概要は以下のとおり。

（月探査の意義、目的）

- ・ 厳しい環境での技術の確立、科学研究による宇宙科学の探求。
- ・ アジアで唯一のISS参加国として、アジアでの宇宙開発を進める代表として月探査に参加する意義がある。
- ・ 活動範囲を広げるのは本能的なもの。進化の過程での必然。
- ・ 有人月探査は、日本の技術力を国内外にアピール。夢と希望を与え次世代の人が宇宙を目指す。
- ・ 月が一番近く、そこに行くことは、日本国内にとっては宇宙開発の推進の機運、海外に対しては日本の技術力の信頼性の向上につながる。
- ・ 月の情報はまだまだ足りないので、開発より調査をメインに探査の目的を設定する。
- ・ 若い世代に興味を持たせ、知的好奇心を満たすような探査を目指す。
- ・ 月に行けば6分の1の重力なので障害のある人も楽に動けるなど、医療面と合わせて考えると重要性が見えてくる。
- ・ 宇宙に出ることは人を知ることだと思う。

（日本らしさ）

- ・ まずは無人探査で土台作りをしていくべき。
- ・ アニメのキャラクター性は、興味をもってもらうのに有効。有名なキャラクターをロボットにしたら子どもたちも宇宙に興味を持つし、大人の関心も高まる。
- ・ 映像伝送は国民の皆さんに興味を持ってもらうためには大事で、ロボットを地球から遠隔操作できるなどは興味深い。
- ・ 「安全かつ低コストな開発」において、膨大な資金をかける国と違ったユニークな存在感を示すために、「環境の番人」の立場をとる。さらに月探査の成果をうまく利用していく、例えば、日本科学未来館の Geo-Cosmos

の月版の Lunar-Cosmos を国際会議での環境のシンボルにするなど。

- ・ 日本らしさは「小型で高機能」と考える。
- ・ 日本らしさとして「和」の精神がある。日本が国際協力の中でそれなくしては出来ないといったようなものをやるべき。

(月探査への期待や提案)

- ・ 有人月探査に期待することとして、探査拠点としてのステーション、通信機器・観測機器の設置、旅行・スポーツなど。
- ・ 国民の一番の関心は、自分が宇宙に行けるといふことがあると思うので、国民も行けるといふアピールをすることが重要ではないか。
- ・ 参加することから始まる、そこから競争意識が出てくる。
- ・ 文系の人など知らない人にこそアイデアを出してもらえば進み方が変わってくると思う。
- ・ 月に研究所を作って大学生でも自由に行けるような世界になってほしい。
- ・ 国際協力をもっと拡げていくことが良い。
- ・ 人の科学、工学という点も必要。月の環境で人にどのような進化の可能性があるか、そういった視点での取組も必要。
- ・ 斬新な意見として、地球外生命体の探索ではなく、作りだすとか、レゴリスによる月の焼き物を作るなど。

以上